谷崎潤一郎全集　第十六卷

谷崎潤一郎全集　第十六卷
定價一五〇〇圓
昭和四十三年二月十二日印刷
昭和四十三年二月二十四日發行
著者　谷崎潤一郎
發行者　山越　豐
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

磯田多佳女のこと

昭和二十一年八月號—九月號「新生」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

○

大友（だいとも）のお多佳さんで通つてゐた祇園の多佳女が去年（昭和二十年）の五月に亡くなつたことを知つたのは、同じ年の六月であつたと思ふ。當時私は作州津山に疎開してゐたので、多佳女の嗣子又一郎氏から熱海西山の舊居へ宛てゝ出された死亡通知が、漸くその時分に廻り廻つて私の手もとに屆いたのであつたと記憶する。私は多佳女に又一郎氏と云ふ嗣子があつたことをも、又一郎氏が實は多佳女の姪の子に當る人であることをも、それまで知らなかつたのであるが、しかし故人には實子がなかつた筈であるから、此の人は多分故人と血のつながりのある人で、養子に貰はれたのであらうとは、ほゞその時に想像した次第であつた。平時ならば葬式には間に合はなかつたとしても直ぐ飛んで行くところであつたが、當時はどうにもならなかつたので、私は取りあへず南禪寺北之坊町に住む又一郎氏に宛てゝ、悔み狀にいさゝかの香花料を添へて送つた。すると折返して又一郎氏から丁寧な挨拶狀が來たが、それによつて私は、多佳女が亡くなつたばかりでなく、あの吉井勇の歌で名高い新橋の大友の家、――何十年來多佳女が住み馴れた、あの白川の水に臨んだ家までが、建物疎開のためにあとかたもなく毀ち去られた事實を知つた。尤も、又一郎氏の手紙で見ると、多佳女はその前に空襲下の都心を逃れて郊外に近い南禪寺畔の又一郎氏の宅に身を寄せてゐたとのこと、そしてそのまゝ患ひついて起てないやうになつたとのことなので、彼女は自分の家が

無殘に取り壞されるところを見ないで濟んだ譯なのであつた。その手紙は又、故人が新橋を立ち去る時に自分の部屋の前に植わつてゐた紫陽花（あぢさゐ）に名殘を惜しみ、南禪寺の方へ移つてからもその花のことを氣にしてゐたことを語つてゐるのであつたが、私はそれを讀んでいかにも多佳女らしいと感じ、戰爭の慘禍がとめどもなくいろ〳〵な方へ波及するのを歎かずにはゐられなかつた。さう云へば若かりし日の彼女が姉の死を悼んだ句に、「紫陽花や見る〳〵變る爪の色」と云ふのがあつたが、それがその紫陽花なのであらうか、彼女の姉と云ふ人はその花の咲く頃に、あの川の上にさしかけた釣殿のやうな座敷で息を引き取つたのであらうか、など丶、私は又そんなことを思つたりもした。

○

越えて今年の五月、「磯田おたかさんが亡くなられて玆に一周忌を迎へましたので生前親しく藝事を通じて交りし者が集りまして故人の爲に追善の演藝會を催しましておもひでのありし日を忍びたいと存じます」と云ふ松本さだ女の案內狀を貰つた時は、私は旣に京都の住人になつてゐた。會は五月二十五日の午後一時から知恩院境內の源光院と云ふ寺で催され、出し物は大友の客筋であつた旦那衆の人々が語る荻江節、淸元、一中節、宮薗節等の外に、袖香爐、短夜、露の蝶、桶取、花の旅等の京舞があるとのことであつた。（これらの舞は、他は皆私に馴染の深い地唄物であつたが、短夜と云ふのは荻江節の、「川水や、ゆく月さへも夏の空」と云ふあれである。此の唄は故人が好きで、あれに京舞の振を附けてみたらとよく云つてゐたので、今度さだ女が振附をして自ら舞ふことにしたのであると云ふ）私は、まだ作州の疎開地に

とゞまつてゐた妻や、妻の妹のS子や娘のE子などが、いづれも上方舞にあこがれてゐたことを知つてゐたので、此の催しのあることを云つて遣つて入洛を促し、當日は彼女たちを皆連れて出かけた。生憎瀟々たる雨の日であつたが、故人は雨が好きであつたさうで、先日一周忌を營んだ日にも雨が降り、今日も亦雨になりましたのはよい供養でございますと、又一郎氏は云ふのであつた。それに會場の源光院と云ふ寺もよかつた。それは圓山公園を北へ、知恩院の山門の方へ抜けて粟田口へつゞく廣い鋪裝道路がある、あの道の、山門の前を少し行つて、雜草のあひだに纔かに通じてゐる細い徑をだら〳〵と西へ下つた北側にあつて、知恩院の塔頭ではあるが、今は某氏が知恩院から借りた形式で、私邸に使つてゐるのであると云ふ。こゝの庫裡の二階には、嘗て上田敏がゐたこともあり、又一郎氏も、今の南禪寺畔に家居する前、十年ばかりもこゝに住んでゐたさうであるが、多佳女は此の寺院の庭の閑寂なのを愛して、しば〳〵此處へ來てひとり靜かに三味線などを彈いてゐたものださうで、故人に取つても因緣の深い場所なのであつた。會場は、昔本堂であつた建物の二た間を打ち拔いて一方に置舞臺を据ゑ、一方に來會者の座席を設け、座席のうしろ、舞臺と向ひ合ふ廊下の壁に、故人の寫眞と、遺墨と、漱石の軸とが揭げてあつた。故人は寫眞を撮ることが嫌ひだつたので、晩年に寫したものは見當らないと云ふことで、そこに飾つてあつたのは、いつぞや私が青春物語の中に挿入するために貸して貰つたことのある、三十臺の時の寫眞であつたが、遺墨は淡彩の月見草の繪に、「うすものや川原つたひの草しめり」と云ふ句を題したもので、句も繪も故人の筆であつた。漱石のは、「木屋町に宿をとりて川向のお多佳さんに」と云ふ前書のある、「春の川を隔てゝ男女哉」と云ふ句であつたが、これは大正四年頃の春、漱石が入洛して木屋町の大嘉に泊つてゐた時の

ものであらうか。戰災で家財道具の大半を燒いてしまつた私は、殘りの僅かな書類や書物などをも熱海や作州に置いたまゝ殆ど身一つで出て來てゐるので、手もとに何も參考にするものを持ち合はしてゐないが、又一郎氏藏するところの俳句の雜誌「澁柿」の大正六年二月發行漱石先生追悼號に寄稿してゐる多佳女の漱石に關する日記「洛にてお目にかゝるの記」を見ると、その年の三月二十日頃から四月十六日まで京都に逗留してゐた漱石は、初めて會つた多佳女が氣に入つたものと見えて滯在中たび〳〵彼女と往來し、持病の胃痛を起した時は彼女の家で二日も病臥したりしてゐる。彼女の日記も亦そのことを記して、「我が一生の內病氣なればこそぎおんのお茶屋で二夜もとまるとは思ひもよらぬこととお笑ひになる、私のうちも先生のやうなお方を病氣のおかげでとまつて貰ひました、一生の語り草とみな〳〵してしみ〴〵語る」などゝ云つてゐるので、多分その時分に書いたものであらうと思へるけれども、なほ委しくは往年の漱石門下の人々、豐隆氏や草平氏などに尋ねたらよく分るに違ひない。私は此の二つの掛軸を前にして、自分が初めて多佳女に會つた當時のこと――それは漱石と彼女が會つたよりも數年まへ、明治四十五年の春に溯る、――を憶ひ出して懷舊の情に堪へなかつたが、當日多佳女と關係の深い三條の旅館萬家の主人金子竹次郎氏に三十數年ぶりで再會することが出來たのは、まことになつかしい限りであつた。そのほか坂東三津五郎、同簑助、山村流の家元山村わか、大阪の播半の女將などの顏も見えたが、來會者はあまり多からず少からず、雨の日にふさはしいしんみりした會であつた。たゞ私よりも舊く多佳女を識つてゐた筈の吉井勇を始め、文學方面の交友の會する者が少かつたのは物足りない心地がした。

前に書いた吉井勇の歌と云ふのは、「かにかくに祇園は戀し寢るときも枕の下を水の流るゝ」と云ふのであるが、吉井がこれを詠んだのは矢張明治の末年か大正の初め頃、歌集「酒ほがひ」の時代ではなかつたゞらうか。そして私の記憶に據れば、此の歌は最初、「かにかくに祇園は嬉し醉ひざめの枕の下を水の流るゝ」であつたやうに思ふのであるが、作者は考へるところがあつて後年今のやうな形に訂正したのではないであらうか。私は、老後の作者が若い時に用ひた奔放な言葉を穩やかな字句に改める氣持も分らなくはないし、後の形の歌もそれはそれでよいと思ふが、さうするともとの形とは意味が少し違つて來るし、私にはもとの形の方が感じがぴつたり來るのである。先日、六月二十九日の夕刻五時半頃に、私はひとり此の歌を思ひ出しながら、ありし日の大友の座敷を偲ぶために毀ち去られたその家の跡に行つて見た。四條通りの、南座のすぐ向うを北へ這入ると、大和大路、――俗に繩手と呼んでゐる街路になるが、あれを北へ進むこと數丁、白川が賀茂川に注ぐあたりに架した大和橋を渡り、ちよつと行つて東へ折れた横丁が、大友のあつた新橋の通りで、正確に云へば新橋通大和大路東入ル元吉町と云ふ町名である。私が初めて大友へ遊びに來た頃の祇園は、今の花見小路がまだ開けないで、四條通りの北側から此の新橋へかけての一郭に茶屋が多く集つてをり、此のあたりが最も繁昌してゐるやうに見受けられたが、終戰後の今日も、兩側に格子作りの茶屋や置屋が並んでゐる町の姿は、明治の頃とあまり大して變つてゐない。蓋し祇園の遊里のうちでは此の邊が一番昔の面影をとゞめてゐるのではあるまいか。花洛名勝圖會に載つてゐる大和

橋附近の圖などを見ても、川の北岸の人家が一と側だけ、水に沿うて細長く疎開されたことを除けば、此の界隈の感じが德川時代とさう違つてゐないことが分る。同書の圖に、「此川岸の酒樓を俗に引こみの富田屋と稱す大木の柳あり今も猶年々繁茂せり」と記し、「靑柳のゑまひつくろふ陰に來て春やしるらん白川の水」と云ふ歌が載せてあるが、柳は今も幾條かの枝を垂らして川面を嬲つてゐるのである。私は新橋通りへ曲つて、正面に東山の新綠と知恩院の甍の見える往來のまん中に彳み、暫く街の有樣を眺めてゐたが、本來ならば遊客の出さかる時刻であるのに、昨今の花柳界は何處も火が消えたやうなので、此のあたりもひつそりとして、一人の藝者も舞妓も通らず、絃歌の聲も聞えて來ない。進駐軍の兵士が一人、路上で自轉車の稽古をしてゐるのが、一二間行つては梶を取り損ねて横倒しに倒れかゝるのを、「あの進駐軍自轉車によう乘らんぜ」と、子供が傍で囃し立てゝゐる。大友はその通りの南側の、路傍に地藏樣が祭つてある所を一二軒行つたあたり、西から數へて二つ目の露地の奥にあつたので、行つて見ると、表通りは昔のまゝの家並であるのに、ちよつと露地へ這入つたゞけですつかり樣子が違つてゐる。以前は表通りから覗くと、露地の奥が暗く見えたのに、今はぽかツと穴があいたやうに明るくなつてゐて、取り除かれた家のあとが蔬菜畑に化してをり、盜賊避けの竹垣が圍らしてあるが、折よく一人の少年がその竹垣の一部を外したまゝ畑の土を掘り返してゐるので、私は中へ這入つて行つて、こゝが確かに大友の跡であるか否かを問ひ質した後、低徊これを久しうした。實は私は、家が潰されたゞけなので空爆に遭つたのとは違ふから、少しは思ひ出の種になるやうなものが殘つてゐさうに考へてゐたのであるが、かう云ふ風に完全に掘り返されてしまつたのでは、何一つ殘る譯はない。彼女が名殘を惜しんだと云ふ紫陽花は私は覺えてゐ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ないけれども、毎年、ちやうど今の季節に來ると、木槿の花の咲いてゐるのが二階座敷から見えたものだのに、勿論そんなものもない。昔を語るものと云つては、畑の向うを流れて行く白川と、その淙々たる水音ばかりである。

○

大友の家屋が疎開されることに決定して、建物に紙が貼られたのは去年の三月十九日ださうであるが、多佳女は當時病床にあつてその由を聞き、あの家を建てる時には間取りや何かのことに就いて隨分多くの人たちが智慧を絞つてくれたものであつたのに、と云つて、人間の「すみか」の果敢ないことを歎じたと云ふ。それもあの邊全體が空襲で燒かれたとか云ふなら諦めやうもあらうけれども、戰災を免れた唯一の大都市である京都に住みながら、たま〳〵疎開の區域の中に入れられて取り潰される運命に遭つたのでは、當人としてどんなに思ひ切りが惡かつたであらう。現に、その蔬菜畑の中に立つて眺めると、川の北岸の帶のやうな細い一線が空地になつてゐるだけで、對岸の人家は昔のまゝである。僅か一とすぢの水を隔てゝ大友と向ひ合つた岸には、すつかり簾をおろした二階家と、その西隣に塀がつゞいてゐるのであるが、さう云へば私は、いつも大友の座敷の方から此の二階家と此の塀とを好奇心を以て見守つた覺えがある。と云ふのは、その對岸も同じ遊里の中であるから、それらの家も多分茶屋か置屋であるらしく思へるのに、私は嘗てそれらの中から花やかな話ごゑや唄ごゑが起つたのを聞いたことがなかつたからである。いつ來て見ても、その二階家や塀の中は人が住んでゐないやうに森閑として、夜になつても灯影一つ漏れるでは

なく、此方側の大友の座敷からさす明りを受けて、闇の中にしめやかに眠つてをり、兩岸のあひだを流れる水音ばかりが更けるにつれて耳につくので、遊里がこんなに靜かなのは流石に京都であると思つて感心したことがしば〳〵あつた。今日もそれらの家の靜かさは昔の通りで、夏の夕ぐれであると云ふのに、二階の欄干から顏を出す女もゐない。たゞ川の中に二三人の男が降りて、彼方此方の石崖の隙間などを覗きながら何かを漁つてゐるので、あれは何をしてゐるのかと少年に問ふと、鰻を獲つてゐるのですと云ふ。此の白川と云ふ川は、歷史や古典文學に出て來る名高い川であるが、此の邊で幅五間ぐらゐ、深さ三四尺のさゝやかな流れで、これが斯う云ふ人家の櫛比するせゝこましい街中に、暗渠にもされずに殘つてゐるのは、矢張京都なればこそであらう。が、さう云つても普通の堀割や溝川とは違つて、水は淸洌と云ふ程ではないが川床の砂利が見えるくらゐに透き徹つてをり、いつもさや〳〵と咽ぶが如き音を立てゝ細かい波を作りながら岸を洗つて行くのである。川底は平らで、一面に同じやうなさゞれ石が並んでをり、淺いけれども常に一定の水を湛へて流れつゝある。そして汀の家々は、石崖が低いので殆ど水面とすれ〳〵に、而もぴつたりと岸に接して建つてゐるので、舞妓が窓の欄干にでも靠れゝば振袖の先が濡れるかと思へるくらゐである。水と人家とがこんな風に親しみ合つてゐる巷の情趣を、私は中國の蘇州などでは見たことがあるが內地では見たことがない。されば此のあたりの家に泊れば何處でも「枕の下を水の流るゝ」感じがする譯で、大友に限つたことではないが、しかし多佳女の居間であつた三疊の室は、わけても水との緣が密接であつたと思ふ。萬家の金子氏の話に、花鳥風月に心を寄せてゐた多佳女も、一面お茶屋の女將と云ふ生活をしてゐたことであるから、時には厭なお客の座敷にも出、面倒臭い帳附けなどもしなければな

らなかつたが、それでも一日の營みを終へて自分の部屋ときまつてゐる三疊に這入り、床下を流れるせゝらぎの音を聞きながら枕に就くと、その日の勞苦がきれいに洗ひ去られ、頭の中のくしゃ〳〵が一遍にすうつと忘れ去られて安らかに眠ることが出來ると、いつもさう云つてゐたと云ふ。ところで、大友は大正二三年頃に一度改築してゐるのであるが、私がこゝに云ふのは改築しない前の大友のことで、吉井勇の歌が出來たのもその方であることは言を俟たない。多佳女は改築後の大友にも三疊の居間を設け、大體昔の面影を傳へるやうに造つたので、その部屋も惡くはなかつたけれども、やはり昔の三疊の方がよかつた。と云つても私は、昔の三疊と後の三疊と何處がどう云ふ風に違つてゐたか、はつきりした記憶はない。菊池契月氏門下である又一郎氏が、第一回文展に「川沿ひの家」と題して出品してゐるのは後の三疊の方なので、試みに又一郎氏に賴んで昔の三疊の圖を畫いて貰つたが、又一郎氏も幼少の折のことでうろ覺えにしか覺えてゐず、正確な圖は畫けないと云ふ。改築前の大友は、嘗て青春物語にも書いたやうに、時代を帶びた柱や板の間が黑光りに光り、家全體がちよつとした地震にも倒れさうに恐ろしく傾いてゐたが、あの方が何處か庵室めいた侘びしさがあつて、多佳女のやうな人が住むには却つてふさはしくはあつた。又一郎氏の語るところでは、新橋の橋下を北から南へ流れてゐる白川が、巽橋のあたりで折れ曲つて東から西へ流れるやうになつてをり、汀の線に若干の凹凸が出來てゐるので、昔の大友の三疊はその地形の上に水に突き出して造られてゐたのであるが、改築後はもつと水から引つ込めて建てたので、前のやうな情趣がなくなつたのであると云ふ。私は、明治の末期以來多くの文人墨客が多佳女との交りを求めて集つたのが此の水のほとりであることを思ひ、蔬菜畑の中を往つたり來たりしてゐたが、やがて表通りに戻つて、

新橋の上と、巽橋の上で、又暫く低徊顧望しながら水の音を聽いた。建物疎開は下流の大和橋から此の邊までゞ終つてゐるのであるが、「祇園の新橋」として名高い新橋も、來て見れば欄干に鐵の棒を通した小さな石の橋に過ぎない。こゝにも大きな柳が一本、橋の東北の袂に植わつてゐるが、嘗て此の橋畔の柳が枯れた時、あすこに柳がなくては祇園らしくないと云つて、町の人が市に懇請して新しく植ゑて貰つたのが今の柳で、成長の早い木であるから數年の間に斯樣に伸びたのであると云ふ。新橋と直角にかゝつてゐる巽橋は、木の橋なので一層可愛い。何しろ川幅が五間にも足らぬくらゐなので、橋の上に立つてゐると、映畫のセツトの中にでもゐるやうである。私は巽橋を渡らずに新橋通りをもう一遍縄手通りへ引き返して大和橋を渡り、末吉町の通りへ曲つて祇園乙部の花街を拔け、東山線の石段下停留場へ出て電車に乘つた。

○

明治四十三年七月一日發行の「新小說」に、「代表的婦人」と云ふ欄があつて、豐竹呂昇、富田屋八千代、上村松園、伊賀おとら、鳩山春子、日向きむ子、江木榮子、福田英子、平塚明子、榊原蕉園、花月しづ、立花屋橋之助等々各方面の婦人の略歷と談話筆記とを載せてゐる中に多佳女のも見えるが、それに依ると、

女史は明治十二年新橋縄手東入妓樓大友に生る、姉は現に有名なる祇園一力樓の女將おさだにして、幼きより讀書の趣味深く、長じて校書の班に列するに及び故紅葉子小波山人故米僊畫伯などの知遇を得て益々文藝の趣味を解するに至り、一時文學藝妓の名高かりしが、幾程もなく廢籍して陶器店九雲堂を開

き、今はそを實兄に托して身を閑散に置き、專ら文藝の趣味にあくがれ居れり、歌は池邊義象氏に俳句は水落露石氏に畫は故淺井忠氏に學び、歳三十二、現住は新橋繩手東。

とあり、多佳女の歌としては、

とく咲けと降る春雨はそのあした
花につれなきものとやなるらむ

俳句としては、

菜の花や春に馴染まぬ預り兒
三の糸高切れのして時鳥
死ぬと云ふ女の癖やほとゝぎす

の句が載つてゐる。私が此の間又一郎氏から聞いたのでは、多佳女の父はもと舞鶴藩の武士で磯田木間太と云ひ、維新の後京に出て繩手邊に住み、手習などを敎へてゐるうちに、當時祇園から太棹の藝者として出てゐた妓と馴染むやうになり、いつか彼女を妻とするに至つた。多佳女はその間に出來た娘で、彼女の文人趣味は父の感化らしいとのこと。又名前のタカは戸籍では「たか」であるが、後年柳原義光伯が「多佳」の文字を選んで與へたものであるとのこと。なほ「新小說」の記事には繪を淺井忠に學んだとあるが、久保田米僊、岸竹堂等にも學んだ、但し正式に弟子として入門したのではなく、時々遊びに行つたりなどしていつとなく習ひ覺えたと云ふ程度であるとのこと。そして、金子竹次郎氏の話では、書は李北海を學んだ。これは婦人としてちよつと意外のやうであるが、彼女にそれをすゝめたのは故岡本橘仙氏（此の人

のことは後に述べる）であると云ふ。多佳女は若い時から光悅崇拜だつたので、書も光悅を習はうとしたところ、橘仙氏が、女子の生命は假名書きにあるけれども、本當に立派な假名を書くためには、矢張漢土の固い文字から稽古して懸らなければいけないと云つて、李北海の拓本をすゝめたので、多佳女はその敎を守り、毎日二十分ぐらゐづゝ臨書することを二三年續けたと云ふ。成る程さう聞けば、彼女の假名書きには何となく角々（かどかど）に固いところがあつて、恰も京の井上流の舞を見る如き感じがする。

○

私が初めて多佳女に會つたのは前揭の「新小說」が發行されてから二年の後、多佳女が三十四歲の初夏のことであるから、今思ふと、ちやうど陶器店九雲堂を止めた彼女が「身を閑散に置き、專ら文藝の趣味にあくがれ」てゐた時代に相當する譯である。たしか私は金子氏の紹介で、長田幹彥氏と一緒にあの大友の三疊で初對面の挨拶をしたのであつたが、當時多佳女について幾らか豫備知識を持つてゐた幹彥氏は、彼女が今は金子氏の叔父岡本橘仙氏の側室であること、しかし嘗ては淺井忠畫伯の愛妾であつたこと、そして同畫伯の後援で一時四條通りに陶器の店を出してゐた人であること、などを、そつと私に囁いてくれたものであつた。その頃の噂では、大友と云ふお茶屋は彼女の妹が經營してゐるのだと云ふことであつたが、私達が行つてもその妹と云ふ人は殆ど顏を見せたことがなく、いつも彼女が應接し、折にふれては得意の一中節や河東節を聞かしてくれたりしたものなので、彼女は或る時はあの家の女將のやうにも見え、或る時は姐さん株の老妓のやうにも見え、又あの三疊の間に紅葉山人の軸などを懸けて閉ぢ籠つてゐる時は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com